戦前期における〈回教〉をめぐる言説・研究序説

―同時代の「文学者」との接点を軸に―

柳瀬　善治

はじめに―問題意識の確認

近年、日本文学・文化の研究領域で「アジア」、ことに戦前期の「アジア」と植民地の問題を扱う研究が積み重ねられてきた。ただし「アジア」に関していうならば、当時多くの研究者によって論じられながら、現在、ほとんど黙殺もしくは忘却されてしまった対象がある。それが〈回教〉、つまりイスラムの問題である。[1] 日本の対アジア政策にも深く関わり、民族運動とそれへの対処政策の鍵として中国―共産党・国民党―に於いても考察され、日本でもいくつかの研究機関で数多くの論と著作を生みながらなぜ〈回教〉という問題が戦後忘却されてしまったのか。本稿では、その点を確かめるための基礎的作業として、戦前期の日本での〈回教〉の表象[2]はどのようなものであったのかを、同時代の「文学者」の言説と照らしながら検証したい。

一　戦前期における「アフガン」表象

「9・11」以後、「イスラム」の問題が浮上した現在の言論状況と結びつけるための梃子として、「アフガン」という固有名とその歴史性を援用してみることとする。坂本龍一との対談集『反定義』で、辺見庸は次のようにコメントしている。

「ニューヨークのグラウンドゼロも写真で見ると凄いけれども、カブールにだってグラウンドゼロがある。アフガン全体ではグラウンドゼロが一杯できた。」「一番感じたのは、九二～三年の内戦のすさまじさを含めて情報の非対称性です。アフガンについて語られることの少なさ。これは地球上の様々な事態について我々が知るべき情報の不公正を象徴しているような気がしました。[3]」

では、この「不在」、「アフガンについて語られることの少なさ」は世界に於いてあるいは日本において戦前からそのように進行していたのか。アフガニスタンは日本の言説空間における「グラウンド・ゼロ」でありつづけたのか。そうではない。この点を確かめるために、戦前のアフガニスタンをめぐる言説を検討する必要がある。

すでに明治期の段階で軍隊関係の資料にアフガンを扱ったものは散見されるが、[4] ここでは一九三〇年以後に限定し、まずもっとも詳細なものである田鍋安之助の著作を取り上げる。田鍋安之助『亜冨汗斯坦』は一九三〇年に東亜同文社から刊行された六百ページに及ぶ大部の著

作である。構成は上「亜冨汗斯坦事情」下「歴史」に分かれ、地理、気候、産業、人種構成、風俗に及び、歴史は古代アフガニスタンからの王朝の推移、第一アフガン戦役、そして「最近五〇年間のアフガニスタン」では一八七八年の第二アフガン戦争、「アミール・アヌムラハン」の治世を持って閉じられる。著者田鍋は東亜同文会の幹部であり、翌新『東亜同文会と中国』でも彼の活動が検討されている人物である。[5] さらに『続對支回顧録』下巻には彼の略歴として「田鍋安之助君」が掲載され、アフガン滞在時の日誌も収められている。[6] 彼は一九二四年にカブールに滞在しており、本格的にアフガンに滞在した最初の日本人ではないかと言われる。

一般に「保守」とされる東亜同文会の一員である人物が戦前戦後を通じてもっとも詳細な「アフガン」をめぐるモノグラフィーを書いたことの意味は今日考察に値する。「しかれども露國の中亜経営と印度独立運動の進捗を見、又最近我国との間に修好条約の締結された事実に鑑み、亜冨汗斯坦の研究は一日も緩すべからざるに拘はらず、いまだ我国に同国に関する著書あるを聞かず。」（緒言）という一文は彼の動機が国際政治の文脈に示唆されたことを示している（他にこの時期にアフガンに「潜入」した人物の著作としては、布利秋「パミール・アフガニスタン猟奇行」（『改造』13―11　一九三一・十一）がある。[7]）

しかしながら、戦時下のアフガンに滞在した多くは技術者であり、技術者の見た「アフガン」としては、農業技師の尾崎三雄が「農業を通して見たるアフガニスタンの断片」を雑誌『回教圏』（一九三九・十二）に発表し、彼は又講演を元にした「亜細亜の新興国アフガニスタン」（一九三九）というパンフレット形式の著作も記している。[8]

他に目立った活動としては「アフガニスタン協会会報」がある。一九四二年六月の第1号には田鍋「「アフガニスタン」の思い出」や尾崎「アフガニスタンの人々とお茶」の他、「巻頭言」には東亜同文会の井上雅二が名を連ね、さらに「本会報告」では、決算報告や協会役員の名が、「アフガニスタンの消息」ではこの時期のアフガン王室の動向が記されている。この協会は巻末に「アフガニスタン」に関する章を含んだ『印度の歴史と社会』という本の邦訳にも携わっており、ある程度の活動はしていたものと考えられる。[9]

また、美術という観点からは、美術研究者の尾形鮮之助が一九三一年一〇月から一年間インドを訪問した時につけていた日記が、彼の死後『印度日記』（刀江書院　一九三九）として世に出た。その中の「アフガニスタン遠征」という一文は、三二年四月一四日から五月九日までのバーミアン遺跡の調査を記したものであり、ペシャワールとカブールの博物館、バーミアンの石仏の写真が掲載されている。

二　アフガンを舞台にした小説『熱風』の周辺

ではこの当時、アフガニスタンを巡る文学の表象はどのようなものがあったのか。一九三八年に「4A格」で芥川賞候補、戦後『執行猶予』で直木賞を授賞し、また近年渡辺直己の『不敬文学論序説』で批判[10]を受けた『皇后さま』の著者である小山いと子という作家がいる。彼女は一九三九年十二月の『中央公論』[11]に『熱風』というアフガニスタンを舞台にした小説を書いている。小山にはこれを受けた「女と恋―アフガニスタンの情熱―」という一文がある。

「アフガニスタンの女も恋をすることがあるだらうか、とは私が真つ先に考へてきたことであつた。」「私の兄は三年間アフガニスタンにゐたが、女の姿はほとんど見たことがないといつてゐる。」「私は「熱風」といふ小説が書きたくて、アフガニスタンに関する調べを、小説に使つた材料の凡そ十倍くらゐ、回教徒に関する書物を五冊ばかりも讀んでみた。さうして日本によく似てゐるのに興味を覺えると同時に、全く反對の點、それは日本が世界でめづらしいくらゐ宗教には無関心であるのにくらべて、アフガニスタンが殆んど中毒といつていいくらい宗教にわざわいされていることにまた同じ位興味を覺えた。」[12]

ここから小山が当時日本で刊行されていた資料や自分の兄の証言から題材を得ていたことが推測される。小山の旧姓は「池本」であり、彼女のアフガンに3年いた兄とは、おそらく守屋和郎『アフガニスタン』が言及している[13]「土木技師」の「池本」だと思われる。

「アフガニスタン政府から日本の土木技師を一名招聘したいといつて来たときに、良人の九谷皓吉は内務省にゐたが、朝子は勿論皓吉も自分が行くと決まるまでどんなところかまるで知らなかつた。人に聞いてみたが誰もあまり知らなかつた。探しまはつてやつと一二冊の書物を見つけたが、それも一冊はパンフレット、一冊は外人の書いた昔のもので、まだしも百科事典か世界地理学大系の亜細亜編にでもよる方が概略がつかめた。今まで日本人で同国を訪問、或は通過しただけのものを入れても十人に満たぬといふ。」「かつてアマノラハンという英主があった。アマノラハンは明治天皇をはるかに敬慕し奉り諸政の改革を計ったが、終に一九二一年八月英国の絆を脱して独立し、数百年間の鎖国が解かれた。[14]」

この冒頭の記述には田鍋前掲書に対応する記載がある。

「されば数百年鎖国の状態を続けしアフガニスタンは是に至って其国を解放せり」「彼は日本の明治天皇を以て任じ、アフガニスタンを以て西洋諸国と同一の文明国たらしめむと欲し、夜政務に勤め、一日善く九十二時間の勤務を為すと称せられる[15]」

また、この作品には柔道の場面―「間垣六段が黒帯に刺し子の白木綿の柔道着をつけ、同じ服装の陸軍士官と共に出て来て、柔道の型があつた」―が出てくるが、これも当時アフガンに滞在していた柔道家、高垣信道の存在が意識されていたと思われる[16]。

同時代評としては、次の号の『中央公論』に青野季吉の時評「文学の混迷」があるが、ここでの青野の評価は決して高いものではない。「小山いと子氏の「熱風」は、大へんな力作で、その野心や意力といふものには、いちおう敬服する。しかし彼女をしてこの努力を拂はしめたものは、いつたい何だらうかと私は疑念を抱かざるを得なかつた。」「この小説には實にいろいろなものが描かれ、組合はされてゐて、それらが寄つてたかつて、とにかく小説をこしらえあげてゐるといふ感じだ。だが肝心な人物だけをとつても、誰一人としてその像の全きものはないし、何より先ずそれらの人物を凝視する作者が感じられない。[17]」これに『婦人と文学』の宮本百合子の評言、「彼女がそういふ作品に関心を寄せ始めた時代の、戦争が万事であった日本の侵略的空気、技術も文学も、外國そのものさへ軍事目的をもつて考へられた時代を背景として見た場合、彼女の題材の拡大には、文学上周到な考察が加えられなければならなくなつてくる。」「けれども、それらの作品が、題材負けしたことと、登場人物の心情が、生ける人間の姿として

読者に迫つてこないなどを共通な弱点とした」[18]を合わせれば、この作品への評価が理解できる。その野心は評価されながらも、2つの異なる立場から同様の批判が呈せられているのである。

「皓吉はひざまづき、両手をつかへた。なんと思ひまうけぬことであつたらう。額の中は、御帽子を召させられ御横向きの尊顔を示し給へる御晩年の明治天皇の御肖像であつた。幾度拝しまゐらせても、まがふ方なき御尊像であつた。

「陛下。」

あとからあとからあふれるやうに涙がわいてきた。つかへた両手の上にあたゝかく涙が落ちた。

「私はまちがつてゐたのでございませうか。全力をつくしたと思ひましたが、まだ足りなかつたのでございませうか。どうぞ御思召のまゝに私の道をお示し下さいまし。今後どのやうな苦難にあひませうとも、勇気と自信を失いませぬやうどうぞおまもり下さいまし。」[19]

今日の視点からは、ここでも先の田鍋安之助と同様に、恐らく日本で最も早くアフガンを舞台にした小説を書いた作者が戦後に天皇家を礼賛する小説を書く資質を持っていたことの意味が問われなければならない。ソヴィエト侵攻、或いは「9・11」以後のアフガンへの関心はどちらかといえば、反アメリカ・反権力の視点から見られているといえるかもしれないが、当時はむしろ「亜細亜」を視野に入れた保守的な思想の人々、或いはもっぱら貿易や技術者的な観点を持った人々がアフガンへの言説を構成していたのである。この点はアフガンについて言及する際に忘れてはならないことの一つであり、この日本での歴史性を否認して、あたかも自分がニュートラルな立場で「グラウンド・ゼロ」＝「圧倒的な被害者の空間」としてのみ表象されるアフガンと関われると考えることは慎まなければならないのである。

三　「回教圏研究会」の動向

では、アフガニスタンだけではない戦時下の日本での〈回教〉をめぐる言説動向はどういったものだったのか。この点に関しては多くの先行論ですでに検討が為されているが[20]、それ等をふまえながら紹介をしていきたい。

一九三〇年代後半に、イスラムへの関心が高まり、「イスラムブーム」がおこる。そこには日本軍の「国策的な」関心も作用していた[21]。回教圏研究所が大久保幸次を所長とし元トルコ大使である徳川家正の出資を得て設立されたのは一九三八年四月一日であり、最初の名称は「回教圏攻究所」である。これは大久保が一九三三年一〇月に設立した「イスラム学会」を母体としており、小林元、松田寿男らの協力を得て東京市芝区白金三光町に設置された[22]。一九四〇年に蒙古圏で活動し「大陸活動者」の育成や回教徒の婦女子への教育を行っていた善隣協会の支援[23]を得るようになり、「回教圏研究所」と改名、それから終戦まで『月刊回教圏』（一九三八年七月七日付を創刊号とする）を発刊し、活動を続けた。一九四〇年一〇月当時の研究所員は　野原四郎、蒲生礼一、鈴木朝英、宮坂好安、村野孝、幾志直方、勝静夫、佐木秋夫、竹内好、鏡島寛之、井筒俊彦、幼方直吉、田辺穂積、御薗生圭一郎、といった面々である[24]。

この他には雑誌『回教世界』を発刊し陸軍大将林銑十郎を会長とす

る大日本回教協会、『回教事情』を発刊した外務省の回教班、東亜研究所の回教班、大川周明が所長を務める東亜経済調査局の回教班―雑誌「新亜細亜」を発行―などが活動をしていた。野原の回想によれば一九四三年十一月十一、十二日にこれらの団体がすべて集まって外務省で学術報告会が開かれ、野原の他に竹内好も発表したという。[25]

今日の視点から注目されるのは野原四郎の研究である。「回教徒問題について」で野原は次のような指摘をしている。

「特に回教徒に関しては従来曖昧に用いられている回教民族という語を、この際明確にしていく必要が感ぜられる」「ここで、注意を有することは、部族的（或は民族的）と名指されているものと、回教徒民族運動の意味する「民族」との概念の相違である。この民族はまだ定型をなすまでに至らず、只それに向つての方向が察知されるにすぎないが、その趨勢の存在は疑ひえぬ事實である。民族政策上、格別重視しなければならないのは、この新しき「民族」である。[26]」

ここで「Nation」と等置される〈民族〉概念の指摘が為されていることは留意すべき点であり、田村愛理はこの研究の問題点として「国策の回教徒政策に対して有効な批判が出来なかった」「実地調査に基づく等身大の回教徒研究が、結局はアジア侵略の手段と化してしまい、ウルトラ・ナショナリストのそれと共通の枠組みのなかにはめ込まれてしまった[27]」と指摘し、また臼杵陽は「野原の見方は当時の状況から言えば、許される範囲内のぎりぎりの理想論を展開している。それとともに彼は、共栄圏の原理を具体化するために数多くの共栄圏論がものされたり、ドイツ流の生活空間の観念も輸入されたりしたが、模倣ではなく、我国独自の体系を持つよう、内面から努力しなければならないと提言する。それゆえにこの共栄圏の課題の焦点が民族問題にあることも見抜いている[28]」と一定の評価を与える。つまり野原の研究は研究動向の精緻な整理とともに戦後の民族独立運動へと接続し得るその問題設定を評価できると同時に、当時の国策へも回収され得る両義性を持っていたのである。

そして、日米開戦直後、大久保が「大東亜戦争と回教圏」を書き、野原の「回教研究の役割」もその同じ号に掲載されていることは忘れるべきではない。「すでに述べたるが如く、大東亜戦争の目標は西洋の壓迫よりアジアを開放し、世界を覆ふ正しき平和を確立することに存する」「かくて、屈従を強ひられてゐるこれら西方回教徒諸民族も、必ずや大東亜戦争にあがるわが凱歌に、再起への頼もしき響きを感ずるであろう。」「回教研究は、日本の東洋學を、大東亜戦争の目指す建設に對應して、このやうに飛躍させる、重要な手段の一つである。かくて支那やインドネシアもはじめて完全に理解されるであろう。かかる東洋學に裏付けられて、日本のアジア観が成長すれば、早晩再開せらるべき西アジアとの現實的交渉に、それがまた必ず幸ひするであらう。[29]」

前者の大久保の発言の突出振りが際立ち、後者の野原の発言は穏健で「学問的に」見えるが、大久保は所長という立場上、やむを得ずこうした発言をせざるを得なかったともいえ、実際の彼はリベラルな、軍部を嫌う人物だった[30]（大久保の「学問的な」コーラン研究は大久保の死後、戦死した鏡島のコーラン翻訳論とともに戦後出版されていることもつけ加えておくべきだろう[31]）。

さらに、大久保は、「支那回民諸君に告ぐ」という一九三九年六月

二二日に東京中央放送局に於いて中国語に翻訳されて放送された一文で次のようにも述べている。

「過去に於いてかく輝かしい閲歴をもつ支那回民はいまや再び決起せんとしつつあるのである。最近における回教徒諸団体の勃興はこれを物語つてゐる。殊に昨年二月北京に於いて結成された中國回教総連合会また西北回教連合会の如きはまさに現代支那回民の自覚を象徴するものに外ならない。しかも、それは日本の正しき立場を理解せる点において、さらに防共精神を把握せる点において、且つ又東亜共同体的工作の目標とせる点において一層その存在の理由を昂揚するであろう。」[32]

こうした発言の持つ政治性もまた当時の「回教」をめぐる学問場の文脈に付随することも事実なのである。

四　中国の民族政策・民族運動との接点

では、中国での「回」をめぐる政治的言説は日本でどのように受け取られていたのであろうか。大連の満鉄図書館が出していた雑誌『書香』には顧頡剛「回漢問題とその対策」、白寿彝「回教文化研究機関設立の必要を論ず」が大谷生の訳によって掲載されている。[33] 趙盛華「三十年来の中国回教文化概況」（『回教圏』4―5　一九四〇・四）には、回教をめぐる研究状況、コーランの翻訳や回教研究雑誌の動向などが詳細に記載されており、これは顧頡剛が関わっていた歴史地理研究の雑誌『禹貢』からの邦訳である。[34] 顧頡剛は中国の対日抗戦を支えた人物であり、すでに戦時中に竹内好によって紹介され、[35] また『古史弁自序』は一九四〇年六月に創元支那叢書の一冊として平岡武夫訳として訳出され、その後岩波文庫でも刊行されている。[36]

竹内好の「顧頡剛と回教徒問題」は、『禹貢』が数回にわたって回教特集を組んでいたことに着眼し、それがそれまで編まれた西北・辺境特集に連動していることを指摘する。「満州事変以後、あらゆる文化の面で民族主義の波が急激に高まった。その波の一つは、辺境、とに西北への関心となった。」「現に私達に身近くいる一人の古代史研究の学者が、現実の問題である回教徒問題を学問化した過程を、その学者の学問する意欲の内面から辿ってみることによって、一般に文化問題としての回教の問題が今日支那でいかに存在するか、また逆にそれをあらしめる支那の文化というものが何であるかということ、それを解きほぐすための手がかりのひとつを得たいと思うのである。」[37]

この背後の文脈については、松本まゆみの研究が詳細である。[38] 松本によれば、顧頡剛らの『禹貢』派は「中国古代史研究方法論には一貫して過去をふり返ることによって、現在の中華民族が多エスニック性と文化複合性を盛り込んで形成されたということを証明するという目的」をもち、一九三七年には日本の軍事目的の顕在化により、「荒廃した辺境が実はかつて祖先が開発したものであると本国人が認識し、それによって再開発が行われ、外国の侵略の野心を打ち砕くこと」と学問の目的を標榜するように政治化する。[39] 同グループの一人斎思和は孫文の民族概念を批判して「民族が政治的概念であり、外敵の圧力を受けることによって形成される心理現象」であり、「血統、生活、言語、宗教、風俗、習慣という民族の基準を否定し、反帝国主義という共通の感情に民族の基準を見出した」。[40] このアイデアは国民党の民族

概念に影響を与えたとされる（「斎思和の協調した抗日意識をもち、なおかつ、擬制家族として孫文の協調した血縁関係にあるものが民族と再定義されるようになる」）。また、そこからエスニック集団としての「回」への着眼が可能になる（「辺境に注意を向けるということは西北で最も有力な回教に目を向けるということであった」という、顧頡剛の発言）[41]。

つまり、この時期の中国の〈民族〉概念を刷新する理論運動にいち早く着眼し、紹介をした竹内の慧眼は驚くべきものだが、その政治的背景と問題点にまでは目が届いていないということになるのである[42]。

五　「回教圏研究所所員」竹内好の発言

さらに、竹内には「大東亜共栄圏と回教圏」という論もあることを付け加えておかなければならない。

「旧国民政府は、国内の統一強化のため回教徒にも単一の中華民族であるという自覚を吹き込むことに努力した。回教徒の内部にも賛成者があった。勿論、反対者もあるが表面に出なかっただけである。事変によって日本の指導が確立すると、この方向は破棄された。現在、北支には中国回教総連合会、蒙疆には西北回教連合会という回教徒の組織体ができているが、これは日本の指導によって生まれたものである。そこでは、民族問題を表面に出さずに、回教徒の経済的、文化的地位の向上を計るための地味な工作が行われている[43]。」

この竹内の研究は、当時の中国回教総連合会・西北回教連合会の組織に触れており、現在でも中国ムスリム研究者に引用される基本文献の一つである[44]。また、竹内好「北支・蒙疆の回教」では次のような興味深い一節がある。

「蒙疆回教徒の訓練にあたっている一青年の述懐である。自分は日本人として、日本の神を唯一尊厳なものに信仰している。現にその青年の自宅には神棚が飾られていた。しかし回教徒たちの信仰の対象は、別の唯一神である。自分は回教徒でないが、回教の信仰が彼等にとって正しいものであることを理解できる。ところが命令によって回教徒を神社参拝に連れて行かなければならないことがある。自分は敬虔な気持ちで神社に参拝するが、彼ら回教徒が本心から神社に拝礼するかどうかという疑惑がいつも残る。もし本心からの拝礼でなかったら、それは神社に対する不敬でもあり、自分はその苦痛に耐えない。又信仰の篤い回教徒ほど、その絶対神への帰依は強いはずであるから、一面で回教徒の啓蒙運動に従いながら、他面で回教の神を否定するような矛盾を演じたのでは、訓練の目的が達せられない[45]。」

これと同様の問題をいわば詐術的に解決した同時代の著作として原正男『日本精神と回教』がある[46]。原は、「我國はいかにして回教を消化し、これを同化し、又約四億の回教徒をして日本の尊厳をしらしめ、日本を信頼せしめ、日本に依存せしめ得可きかといふ研究は未だ嘗て試みられなかつたといふも敢て過言ではあるまい。しかも斯の如き研究の成果を俟つてこそ、我国は東亜の新建設を完からしむることが出来るのである[47]」という序文の記述にあるように、本来神道の研究者である原が「いかに日本精神と回教が矛盾しないか」を主張するために、「日本精神の回教に對する包容性」「八百万の神の尊崇と回教のアルラー崇拝との調和法」を論じたものである。

「日本精神は日本國家と不可分である」が「回教のアルラー」は「日本のカミ」ではなく、一種の「霊的存在」であって、国家に反抗するものではない[48]という当時のインドでの動向を全く無視した理解を示したうえで、「アルラー又はイラハ又はゴッドをカミと訳すことを禁止し、『ラ・イラハ・イアラ・アルラー』を日本語に訳して唱えることを禁止すれば、宗教對國家の問題が解決せらるる」「したがって人類に最も自然であり、根本的である日本精神は回教の派生的である部分を是正し、かつ回教自身をもその中に包容することができるとも見られる[49]」という論理によって、日本の回教圏での「善導」を正当化しようとしたものである。

原が詐術的な論理で解消してしまった神道とイスラム教の差異、それを圧殺する植民地工作の問題に、竹内は立ち止まろうとはしているのだが、結局は「わが日本の文化が本質的におおらかで包容性に富んだものであること」という原とほぼ同一の感想に落ち込んでしまう。ここに「文化工作」の矛盾とその狭間に落ち込んだ竹内を含む当時の〈回教〉研究者の政治的な限界が出ているといえる。

竹内の戦時下の活動は魯迅研究を除き、あまり研究史的に評価されているとは言えないが[50]、彼の活動は、これまで全く注目されてこなかった彼のイスラム研究を含めた上で、総合的に評価する必要があると思われる[51]。今まで見たような問題点があるとはいえ、少なくとも竹内はその後忘却された中国でのイスラムの問題に研究員として関心を示し、そして顧頡剛のような学徒の政治的実践を読み取り、また当時の中国回教総連合会・西北回教連合会のような様々な組織にも実際に触れているからである[52]。戦後の彼の国民文学論、ことに〈民族〉の定義に関しては戦前の「中国ムスリム」を巡る〈民族〉の定義をもにらんで多角的に考察すべきではないだろうか[53]。

六　小説での〈回教〉表象―里村欣三と武塙永之助―

また、当時の小説での〈回教〉の表象としては、里村欣三『支那の神鳴』に所収の「回教部落」があげられる。

「メッカの『アルラア』を信ずる回教とは、異教徒に對しては極端に差別的で、戦闘的で、残虐的で、情け容赦もなしに生命まで奪い取ることなどは平気である。だが、コーランの教理に服したとなると、異民族であれ同國人であれ、親切と寛恕と親睦の気魄をもって、四海兄弟の誼を結ぶさうである。従つて回教徒相互の団結は、鐵のやうに強固なものらしい。その強烈な結束力で、彼らは霊峰泰山の山麓に回教部落を形成して、漢民族からの有形無形の壓迫と侮蔑に對抗してきたのだ[54]。」

「ムスリム」に対するその戦闘性への差別的な視点と、その信仰の持つ寛容性への着眼、そして彼らが漢民族との闘争を行ってきたことへの視点がこの短いフレーズに凝縮されている。

他には、武塙永之助『戦記小説　回教徒の村』というまず一般では知られていない作品がある。作家は秋田県出身でのちの文人知事武塙三山の弟であり、本書には青野季吉の序文が添えられている[55]。

「剣を右手に、経典を左手に掲げて世を救はうとした教祖マホメットの宗旨は恩と威とを並び掲げて東亜を救はうとする現代の日本國に當たるものだ。マホメットの流を酌むお前達沙荘の回教徒に俺は日本

兵の行動に見るやうな厳しい節度を見ることができるのである…」「彼等にとつて一日本兵の発言は何ほどのものでもない。分遣隊の兵隊も村人の数をもつてすれば皆殺しにすることができる。が彼らは一軍曹、一分遣隊の背後にある日本といふ強大な國の力を恐れてゐるのである。回教徒は日本の國力とそれに對する支那人の地位を知つてゐる。國家から安定した生存権を與へ得られない彼等は僅かに宗教の救ひにすがりついて生きていかうとし、信仰の保護を日本兵に求めようとしてゐるのである。[56]」

この武塙の小説の一節は、「日本人」が「ムスリム」に接した時の微妙な心理の振幅を示している。上井軍曹によって示される〈回教〉への理解も「日本軍の軍規に似た厳しい節度」「左手に掲げて世を救はうとした教祖マホメットの宗旨は恩と威とを並び掲げて東亜を救はうとする現代の日本國に當たる」という絶えざる「日本」への参照によって保障されている。「一軍曹、一分遣隊の背後にある日本といふ強大な國の力を恐れてゐる」「回教徒は日本の國力とそれに對する支那人の地位を知つてゐる」という当時の政治的な力学に自覚的である点は注意すべき点だが、さらに、回教徒の村人とのコミュニケートが「通譯と言つても上井の支那語ほども日本語を知らなかつた」「上井の口から出る一つか二つ聞き覚えのある単語を捕へて支那語に引きのばしてゐる」通訳によって為されている点もアイロニーを示している。

しかし、〈回教〉に関して徹底的に無関心な現代の「文学研究者」は果たして原や竹内の論理を、あるいは里村や武塙の表象をどこまで批判できるのだろうか。これは「他者表象をどんな政治的・倫理的基準によって裁く事ができるのか」という「ポストコロニアル批評」と呼ばれている研究の根幹に関わる問題である。

あとがきにかえて

戦前期には〈回教〉をめぐる膨大な言説、ジャーナリズム・交通・技術・歴史・政治・資源などあらゆる分野にいたる広がりがあり、それらは皆「東亜共栄圏」の名の元に収束していく。しかし「文学者」による表象は極めて少なく、しかも決定的に限定された視野の中でしか〈回教〉を見ていないことに気づかされる。実際に〈回教〉研究者として中国を回り、政治工作の現場を見た竹内好のような人間のみが例外的といえるが、彼にしてもそこに孕まれる植民地政治と信仰の間の矛盾を処理することは出来ていない。ここに「日本文学」の他者表象の或る種の限界が見えている。また、その歴史的事象さえ完全に忘却し、その点にすら無自覚なこれまでの研究者の認識は、現在基盤そのものが問われているといえる。日本の言論空間での、大川周明の忘却・井筒俊彦の黙殺・そして岡真理への過剰反応や「9・11」へのリアクションの少なさなどから鑑みても、この「日本文学研究」における〈回教〉という Problematique の不在は徹底的かつ批判的に考察されねばならない。[57]「忘却」された戦時下の「回教圏」（インド・中国・アフガニスタンなど）をめぐる数多くの記憶を「想起」し、精神分析流に言えば「徹底操作」する試みを経由したうえで、「9・11」以後の共生と寛容の論理が模索されるべきである。

本稿は二〇〇二・九・一四に中京大学で行われた「横光利一文学会第3回研

究集会」における「シンポジウム　戦争とナショナリズム」での口頭発表の一部を改訂したものである。席上貴重な意見を頂戴した皆様方に厚くお礼申し上げる。なおこれはごく表面的な資料面に関する一部分をまとめた覚書程度のものに過ぎず、〈回教〉をめぐる言説の全体像と詳細な理論的検討はまた別の機会に行う。

注（1）イスラムの〈忘却〉については鈴木規夫『日本人にとってイスラームとは何か』（ちくま新書　一九九八）、鈴木規夫「表象されるムスリム社会」（『思想』一九九六・五）。

（2）この問題意識は佐野正人の研究から示唆された部分が大きい。佐野の「戦後という光源」（『日本文学』二〇〇二・一）、及び拙稿「世俗的批評の〈神学的次元〉」（『日本近代文学』66号　二〇〇二・五）を参照。

（3）辺見庸・坂本龍一『反定義』（朝日新聞社　P12～15）。

（4）日本におけるアフガニスタンに関する文献については、すでに掘込静香が一九八〇年に作成した「アフガニスタン文献総目録」（日本アフガン協会）があり、近年モハバット・セキナ名義の HP「アフガン通信」（http://village.infoweb.ne.jp/~fwkc3828/）でその補足作業が行われている。

アフガニスタンについては他に、広瀬崇子・堀本武功編『アフガニスタン南西アジア情勢を読み解く』（明石書店　二〇〇二・一）、マーテイン・ユアンズ『アフガニスタンの歴史』（明石書店　二〇〇二・九）。

（5）翟新『東亜同文会と中国』（慶応義塾大学出版会　二〇〇一）。および、『東亜同文会史論考』（財団法人霞山会　一九九八）参照。

（6）『対支回顧録　下』「列伝田鍋安之助君」P二六八～二一九（引用は『明治百年史叢書』212　原書房　一九七三による）。また田鍋はチャーレス・エフ・レー『エチオピア帝国』（一九三四・五　斯文書院）という著作の邦訳も行っている。

（7）布は画家という紹介になっている。『改造』では他に「上海戦場解説」という文章を（一九三七・十二）書いており、一九三八年には『北支案内』（一九三八・五　島田書店）を出す―この本に高嶋平三郎が寄せた序文では布は「志賀重昂君の薫陶を受けた」とある―経歴の人物である。

（8）尾崎は一九四〇年には社団法人　農村更生協会編『アフガニスタンを語る会』に収められた座談会に出席し、アフガニスタンに滞在した技術者としての発言をしている。

（9）T・W・ホリダーネス著　アフガニスタン協会訳『印度の歴史と社会』（今日の問題社　一九四三・二）。「アフガニスタン」はP262～305。

（10）渡辺直己『不敬文学論序説』（大田出版　一九九九　P156～158）。また小山いと子『皇后さま』（一九五九・四　朱雀社）。小山については室生犀星『黄金の糸』（一九六一　中央公論社　P72～88）、近代女性作家精選集『オイルシェール』の畑有三による解説（ゆまに書房　二〇〇〇）も参照。

（11）ちなみにこの号には田中克巳が「大陸遠望」を掲載している。

（12）小山いと子「女と恋―アフガニスタンの情熱―」『新亜細亜』2―4　一九四〇・四。

（13）守屋和郎『アフガニスタン』（一九四一・十一　岡倉書房　P262）。

（14）小山いと子『熱風』（『中央公論』一九三九年十二月　引用は単行本『熱風』一九四〇・十一　中央公論社　P1）。

（15）田鍋安之助『亜冨汗斯坦』P590。

（16）小山いと子『熱風』（一九四〇・十一　中央公論社　P98）。柔道家高垣信造については、尾形『印度日記』に記載と写真（P474、505～509）があるほか、『日印協会会報』62号　一九三七・四に「亜冨汗斯坦の近情」という柔道にも触れた一文を寄せている。P38～42。

（17）青野季吉「文学の混迷」『中央公論』一九四〇・一。

（18）宮本百合子『婦人と文学』「人間の像　一九三四―一九三七」（初出『文芸』一九四〇・六）　引用は『宮本百合子全集』12　P385による。

（19）小山いと子『熱風』（一九四〇・十一　中央公論社　P112～113）。言うまでもないがここでの検討は同時代言説との素材面での比較にとどまっており、詳細な小山の作品の分析は別稿に譲りたい。

（20）川村光郎「戦前日本のイスラム・中東研究小史―昭和10年代を中心に―」（『AJAMES』NO2　一九八七、片岡一忠「日本における中国

イスラーム研究」（『大阪教育大学紀要　第Ⅱ部門』第29巻第1号　一九八〇・一〇）、野原四郎・蒲生礼一「回教圏研究所の思い出」『東洋文化』38　一九六四・七、田村愛理「回教圏研究所をめぐって―その人と時代―」（『学習院史学』25号　一九八七・三）、臼杵陽「戦時下回教研究の遺産」（『思想』二〇〇二・九）。『月刊回教圏』についての詳しい検討は他日に譲る。

(21) なお、この当時の「イスラムブーム」を示すものとして、『記録　回教圏展覧会　世界回教徒第一次大会　来朝回教徒視察団』一九三九・十一・七～十九　東京、一九三九・十一・二八～十二・九　大阪松坂屋会場）がある。さらに『大日本回教協会・大阪府立貿易館主催　回教圏貿易座談会』がこの展覧会を受けて企画され（一九九九・十二・五　大阪松坂屋）、記録も残っている。この興味深い資料については稿を改めて紹介したい。

(22) 『善隣協会史　内蒙古における文化活動』（日本モンゴル協会　非売品　一九八一・七）、また山本實彦『蒙古』（改造社　一九三五・十一）も参照。善隣協会の蒙古研究所が刊行していた『蒙古』には保田與重郎が「アジアの廃墟」（一九四〇・一）を、竹内好が「蒙疆の印象」（一九四二・八）を掲載している。

(23) 川村光郎前掲論、野原・蒲生前掲論による。なお、回教圏研究所は一九四〇年にドイツの経済学者J・ハンス『回教圏の経済的現勢』（回教圏研究所訳　回教徒問題叢書）を邦訳しており、経済問題にも関心を寄せていた事がわかる。

(24) 野原四郎・蒲生礼一前掲論P93（この部分は蒲生執筆）。

(25) 野原四郎・蒲生礼一前掲論P87（この部分は野原）。

(26) 野原四郎「回教徒問題について」（一九三四・四　7―2　P2～5）。

(27) 田村愛理　前掲論P33。

(28) 臼杵陽　前掲論P199。

(29) 大久保「大東亜戦争と回教圏」野原「回教研究の役割」（『回教圏』6―1　一九四二・一）。野原は海外での研究の翻訳の必要性と中国と西アジアの実体調査の重要性をいくつかの研究論文を例にあげて説明している。

(30) 野原「回教徒問題について」。

(31) 大久保幸次・鏡島寛之『コーラン研究』（一九五〇　刀江書院）。奇しくもこの出版は大川周明のコーランの翻訳『古蘭』と同年である。

(32) 大久保幸次「支那回民諸君に告ぐ」「月刊回教圏」三巻一号　P4）。中国語訳も掲載されている。

(33) 顧頡剛「回漢問題とその対策」、白寿彝「回教文化研究機関設立の必要を論ず」（『書香』118号　一九三九・一〇）。この号には詳細な「支那回教文献目録」が掲載されている。さらに「中国ムスリム」全般についてはDru C.Cladney Muslim Chinese Ethnic nationalism in the people's republic Harvard U.P 1991。

(34) 『禹貢』5巻10期（一九三六・七）。

(35) 『中国文学』64号　一九四〇年八月には「綏遠の王同春」が訳出されている。

(36) 小倉芳彦『抗日戦下の中国知識人　顧頡剛と日本』（筑摩書房　一九八七）。

(37) 竹内好「顧頡剛と回教徒問題」（月刊『回教圏』第5巻3号　一九四一『竹内好全集』14巻）

(38) 松本まゆみ『中国民族政策の研究』（一九九九　多賀出版）。

(39) 松本まゆみ前掲書P142～143。

(40) 松本まゆみ前掲書P144～146。

(41) 松本まゆみ前掲書P147～150。

(42) 他に回教圏研究所の調査としては研究部編「南京の回教徒」（『回教圏』7―3　一九四三・三　満鉄上海事務所調査部勤務の糟谷賢三郎の調査に幼方直吉と湯浅鉉二が補筆したもの）、湯浅鉉二「南京回教徒に関する覚書」（『回教圏』7―2　一九四三・二）がある。また、文化や教育に関して幅広く調査した小林元『回回』（博文館　一九四〇・四）。

(43) 竹内好　「大東亜共栄圏と回教圏」『支那』（東亜同文会研究編集部内一九四二・七　33―7　引用は『竹内好全集』14巻　P354～355）。また、田中克巳が「回教圏の印象―馬来・スマトラ従軍中に得たる―」という一文を竹内の慫慂で『月刊回教圏』（7―7　一九四三・七）に掲載している。

(44) 松本まゆみ前掲書、新保敦子「西北回教連合会におけるイスラム工作と教育」(『学術研究　教育・社会教育・体育学』48　一九九九)、同「日本占領下の華北におけるイスラム青年工作—中国回教青年団をめぐって」(『早稲田教育評論』14—1　二〇〇〇)、同「日中戦争時期における日本と中国イスラム教徒」(『アジア教育史研究』7　一九九八)。

(45) 竹内好「北支・蒙疆の回教」(『月刊回教圏』6—8・9　一九四二・九　『竹内好全集』14巻所収)。また、竹内は回教圏研究所編『概観回教圏』(誠文堂新光社　一九四二・十一)の「支那・満州国・日本」の章を担当している。P297～333。

(46) 原正男『日本精神と回教』(一九四一・十二　誠美書房)。

(47) 原正男前掲書　P5。

(48) 原正男前掲書　P260～266。

(49) 原正男前掲書　P267、299。

(50) 数少ない評価を与えたものとしては丸川哲史「アジアと日本に向き合う」(『現代思想』二〇〇一・十二)、そして最近刊行された岡本麻子『竹内好の文学精神』(論創社　二〇〇二・六)がある。

(51) 鶴見俊輔『竹内好—ある方法への伝記』(リブロポート　一九九五)が例外的に着目しているが、事実関係の確認にとどまっている。

(52) この組織については、前掲新保敦子の諸研究を参照。

(53) 中国の〈民族〉概念の変遷としてはFrank・Dikotter　The discourse of race in modern china Hurst&company 1992、及びそれを受けた松本まゆみ前掲書。竹内の〈民族〉概念に関してはまた稿を改めて検討したい。

(54) 里村欣三「回教部落」『支那の神鳴』一九四二・一・二〇　六芸社引用は里村欣三著作集第五巻による)。また、『徐州戦　第二の人生』(一九四一・五　河出書房)にも「回教徒」をめぐる類似した記述がある。

(55) 武塙永之助『戦記小説　回教徒の村』(一九四二・九・二〇　牧書房)。本資料については国立国会図書館と秋田県立図書館所蔵のものを閲覧した。

(56) 武塙永之助『戦記小説　回教徒の村』P9～15。また、同書所収の「黄河の氾濫」にも「回教徒」の親子と日本軍兵士との対話が書かれている。同書P263～265。

(57) この点については、拙稿「世俗的批評の〈神学的次元〉」(『日本近代文学』66号　二〇〇二・五)、「テロルにおける倫理の表象可能性」『三重大日本語学文学』12号　二〇〇一を参照。

(二〇〇二・九・二六)

(やなせ　よしはる、鳥羽商船高等専門学校・三重大学・富山大学非常勤講師)